

景／観／文／化

NPO法人 景観デザイン支援機構 Town Design Aid, Japan <http://www.tda-j.or.jp>

2023-01-01

目次

P1

■巻頭

「下北沢のまちづくり」の現在

／小林 正美

P2～5

■TDA NEWS

日韓都市デザイン交流会2022開催報告

【事例1】つなぐデザイン／つながるまちづくり

／一坪 博

【事例2】川越市の景観まちづくりの取り組み

／池田 麗子

【事例3】全羅南道・谷城郡の地域文化再生

／シン・オンジュ

【まち歩き感想】人生のターニングポイントとなった日韓交流会

／ユ・オシク

P6

■「生物多様性」を通して都市と生活が見えてくる その5

／並河 みき

P7

■景観故記

No.4 景観文化としての色

／吉田 慎悟

P8

■身近な景観を作る

第6回 ワイヤレス照明器具

／近田 玲子

■ホワイトボード



小田急線地下化跡地に実現した連続する緑空間

「下北沢のまちづくり」の現在

世田谷区下北沢地区は街の景観を大きく変化させつつも、東京の中西部にあって、ヒューマンスケールの路地のある街、演劇・音楽のメッカとして若者に愛され続けている。一般には、「下北沢地区の再開発」として知られているが、下北沢のまちづくりの変遷内容が、(1) 連続立体交差事業のための都市計画道路問題の紛争期、(2) その後の小田急線上部利用計画と関係者同士の対話の始まり、(3) 最近の鉄道事業者の積極的参画による市民主導型まちづくりなど、幾つかの要素が複合したものであることはあまり知られていない。問題の都市計画道路計画が2003年に初めて市民に示されてから既に20年近くの年月が経ち、ほぼ「街の変化」の全体像が見えてきた状況である。軽量建物しか建てられない線路の軌道上の土地には低層の建物が分節して建てられ、下北沢の売り物であるヒューマンスケールな街並みや広場が形成されており、2.2 kmにわたる線路上空間には、連続する緑空間に加えて、西方から「東京農業大学のサテライトキャンパス」「保育園」「温泉旅館」「学生寮」「店舗兼用住宅」「商業施設」「宿泊施設」など様々な用途の空間がリニアに並び、国内でも例を見ない面白い散歩空間が生まれた。これらの施設は、訪問客と共に地域住民にも親しまれ、周辺居住環境におけるQOL（生活の質）を上げることに大きく貢献している。

この地域において、利用されなくなった都市の土木インフラの空間に新しい環境装置としての都心型「グリーンインフラ」を皆で実現し、防災性、資源循環、景観向上およびコミュニティ維持に貢献していることは意義深い。加えて、市民たちが政治的対立構造を乗り越え、自ら参画協働するプロセスを学び実践し、目に見える形で街の変化に貢献した点は特筆すべき点である。また、ラウンドテーブル的話合いの場やワークショップなどを契機に、行政、市民、事業者が同じプラットフォームで対話をはじめた効果は大きい。下北沢では街の危機を皆が共体験することで、社会関係資本（ソーシャルキャピタル）が加速的に醸成されたのではないだろうか。

明治大学教授／TDA正会員 小林 正美

日韓都市デザイン交流会2022 開催報告

2015年から始まった本交流会は、新型コロナウイルスの世界的な流行によって、オンラインでの開催が続いていたが、昨年10月21日、22日に韓国から25名の視察団をお招きし、久しぶりの対面で開催することができた。当日は、視察地である世田谷区、川越市のご担当者にご協力いただき、それぞれ現地を視察した。視察後は、両視察地のレクチャー、日本と韓国側の事例紹介が行われた。（日本語訳：オム・ジョン）

【事例1】

つなぐデザイン／つながるまちづくり

世田谷区北沢総合支所 街づくり課 一坪 博

世田谷区では、小田急電鉄小田原線（代々木上原駅～梅ヶ丘駅間）の鉄道地下化に伴い生じた線路跡地を利用した街づくりについて、住民、鉄道事業者とともに検討を進めてきた。2013年3月に在来線が地下化され、「開かずの踏切（ピーク時の開放時間が60分のうち10分）」と呼ばれた下北沢駅の踏切を含む9箇所の踏切が解消され、交通渋滞の緩和や暮らしの利便性が向上した。鉄道地下化から9年が経ち、地上を小田急線が走っていたとは想像できないような新たな空間が生まれ、最近では、様々なメディアでも紹介され、ドラマ撮影のロケ地にもなるなど、新しい活気を見せている。

この東北沢・下北沢・世田谷代田の3駅につながる1.7キロメートルの線路跡地の整備にあたっては、これまで継続した住民参加によるプロセスを経て進めてきており、区が駅前広場や通路、緑地小広場等の公共施設を整備し、通路沿いやその周辺に小田急電鉄の商業施設や温泉旅館、保育園などが整備され、現在、下北沢駅前広場と一部通路を除く全ての施設整備が完了している。

今回は、景観デザイン支援機構の機関紙ということから、区と小田急電鉄がどのように連携し、どのようにデザイン調整を行ってきたかを中心に紹介することとする。



写真① 世田谷代田駅東側の通路と温泉旅館

線路跡地の整備にあたっては、区と小田急電鉄の関係者がお互いに役割を分担しながら、同じ方向に向かって街づくりに取り組む必要があった。しかし、当事業のように長期に渡る規模の大きな事業の場合、行政側は、いくつもの部署が担当し、異動による担当者の交代も生じてしまう。また、小田急電鉄側についても、異なる用途・規模の施設がいくつも配置され、施設毎に設計者が異なるといった具合に、事業に関わる者は多岐に渡ることが想定された。

そこで、区では、それぞれの担当者が、同じ方向性をもって取り組めるようデザイン指針となる「北沢デザインガイド」を冊子にとりまとめた。デザインガイドは、住民参加によりつくりあげた3つのデザインコンセプトを基に、3駅周辺の街の特徴やそれを活かすための配慮事項、施設整備における配置、素材、形状などに関する7つのデザインコードなどを示している。例えば「植栽」については、四季の彩りが感じられる変化に富んだ植栽計画となるよう参考リストを、「境界」については、敷地境界にとらわれず一体的に整備した事例の写真を参考イメージとして掲載し、ビジュアル的にも共有しやすい内容としている。

そのデザインガイドの内容を各施設の担当者が踏まえながら設計が進められた。

例えば、世田谷代田駅周辺には、歴史ある日本家屋や豊かな緑のある閑静な住宅地が広がっていることから、周辺の緑とのつながりを意識し、林の中を散策しているような空間整備（写真①）がなされている。また、区の通路と小田急電鉄の施設の舗装材を揃え、官民境界も目立たないように配慮された一体的なプランニングも随所にみることができる。

こういったデザインの調整は、デザイ

ン調整会議という施設整備の担当者が一堂に介する場で行われた。デザイン調整会議には、デザインアドバイザーとして出口敦教授（東京大学大学院新領域創成科学研究科）を招き、世田谷区と小田急電鉄の担当者がそれぞれの計画案を説明し、段差の解消や照明の配置等、細部の調整すべき事項を確認しながら進めていった。その結果、生まれたシームレスな空間は、通路と施設だけでなく、既存の街とも緩やかにつながり、街に溶け込んだ施設（写真②）が整備されていった。整備された空間を利用する人々を見てみると、整備主体が世田谷区か小田急電鉄なのかといったことは、一切関係はなく、快適なひとつながりの空間があることが利用者にとって大切な視点なのだと実感する。

一方、施設が続々と誕生し、街の発展とともに来街者が増えてくると、ごみの問題や路上飲みなどの様々な課題が顕著になってきている。

施設同士をつなぐ、そして街とつながるデザインが生まれた今、更なる街の魅力向上につながる街づくりに向けて、街をどのように使いこなし、維持管理していくか、地域の商店街や自治会町会と行政、鉄道事業者が一緒になって、「地域マネジメントの仕組みづくり」を考える段階にきている。



写真② 街と緩やかにつながる線路跡地の施設群
（提供：ツバメアーキテクツ）

【事例2】

川越市の景観まちづくりの取組み

川越市都市計画部都市景観課 池田 麗子

川越市は埼玉県南西部に位置する人口約35万人の中核市です。大正11年(1922年)に埼玉県下初の市制を施行し、令和4年12月に記念すべき市制施行100周年を迎えました。江戸時代には、江戸への物資の集散地として発展し、新河岸川による舟運などで経済的に大きく栄え、現在も小江戸の愛称で親しまれています。近年は、観光都市として取り上げていただく機会が増えていますが、農業、工業、商業共にバランスの良い発展が見られるほか、東京のベッドタウンとして住宅開発も進んでおり、現在でも人口は微増しています。

川越の代名詞でもある川越一番街商店街の「蔵造りの町並み」は、明治26年(1893年)の大火後、当時の豪商たちが、日本の伝統的な防火建築である土蔵造りを採用し、こぞって蔵造り町家を建築したことにより形成されたものです。昭和6年(1931)の舟運の停止や鉄道の発達による商業地の移動、戦後の急速な都市化と車社会の進展等の影響を受け衰退の憂き目に遭ったことで、多くの蔵造り町家の取り壊しが進んだ時期もありましたが、伝統的建造物群保存地区制度の新設や全国的な町並み保存運動等の機運の高まりを受けて、昭和58年(1983)に、住民・商店主・蔵造りの町並みに関心を持つ市内外の専門家等からなる市民団体「川越蔵の会(現：NPO法人川越蔵の会)」が発足したことで、商業活性化による町並み保存をメインテーマとした町並み再生の提案やイベントが実施され、川越のまちの魅力は徐々に理解されるようになりました。

昭和62年(1987)には、川越一番街商業組合において、自主的な諮問組織となる「川越町並み委員会」が発足し、翌年(1988)には、都市形成や建築意匠に関する町の自主的なルールブックとなる「町づくり規範」を制定。個々の建築行為に対し、町並みへの調和が図られているか、専門家の助言を受けながら住民自身で審査し協議するという活動は、現在も月例で継続されています。

その後、行政も町の動きを支援するため、通りの電線地中化工事や都市計画道路の縮小変更を行った事で、「蔵造りの町並み」を中心とする7.8haの伝統的建造物群保

存地区への都市計画決定が実現し、平成11年(1999)に国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定されました。

これにより、地区内すべての建造物の現状変更行為にはじまり、木一本の伐採や看板の設置一つについても市の許可が必要となるなど、保存のための厳しい制限を受ける一方で、文化庁からの補助金等の活用が可能となったことで町並みの保存整備は一気に進み、コロナ禍前には年間730万人を超える多くの観光客の来訪がありました。

伝統的建造物群保存地区の周辺は、景観法を活用した景観まちづくりを行っています。旧城下町の範囲となる川越十カ町地区は、川越市景観計画において川越市都市景観条例に基づく都市景観形成地域として指定することで、届出制度を活用した景観形成を図っています。建築行為の際に守るべきルールとなる都市景観形成基準は、地元の代表と協働で作成しました。例えば、「建築物の最高の高さは、「時の鐘」の高さを超えないよう16m以下とする。」など、昔から地域で受け継がれてきた建物を建てる際の配慮事項や作法についても盛り込んだ基準となっています。

個々の歴史的建造物については、景観重要建造物に指定することで、保存を図っています。令和4年12月現在、58件を景観重要建造物に指定しており、修理費等への補助も行っています。景観法以前に市の独自条例により指定した都市景観重要建築物(28件)についても、所有者の理解を得ながら、順次、景観重要建造物への移行指定を進めています。

更なる歴史まちづくりの推進に向け、平成23年に国の認定計画となる「川越市歴史的風致維持向上計画」を策定しました。



時の鐘の通り

本計画では、毎年10月の第3土、日曜日に山車行事が行われる「川越まつり」、蔵造りの町並みに代表される「物資の集散と商業都市川越の発展」、喜多院や蓮馨寺等の門前に広がる「寺社門前の賑わい」の3つを、川越市固有の歴史的風致として定めました。これらの歴史的風致を維持向上するための事業として、市が所有する歴史的建造物の整備事業や歴史的地区環境整備街路事業(道路美装化)等のハード整備や民間の所有する歴史的建造物への修理費の補助や保存活動への支援等のソフト事業を位置づけ、社会資本整備総合交付金等を活用し、事業の推進と計画的な進行管理を行っています。令和3年度からは第2期計画がスタートしており、令和6年度の文化創造インキュベーション施設としての開設を目指す市指定文化財建造物の旧川越織物市場整備事業を実施しています。

本市のこれまでの景観まちづくりは、歴史的建造物の保存が中心でしたが、これからは、それらをいかに活用し、周辺地域に活力をもたらす資源に育てるかが重要になると考えます。これまでの事業を引き続き充実させるとともに、歴史的建造物の再生・利活用が民間主導で展開されるようになるなど持続可能なシステムの構築を目指し、景観まちづくりに取り組んでいます。



川越まつりに見る歴史的風致

【事例3】

全羅南道・谷城郡の地域文化再生

DUDAデザイン研究所 代表 シン・オンジュ

谷城郡は、一般には観光地よりはホラー映画のタイトルでよく知られている場所だ。日本の國村隼が出た『谷城（邦画タイトル：哭声／コクソン）』という映画のロケ地である。この地域は以前から観光用蒸気機関車が往来する汽車村を訪れる家族連れの観光客が多い場所だった。

地域の代表的なソムジン川とメタセコイア道、そして韓国の昔話の登場人物で、親孝行で有名なシムジョンが生まれたところだとも言われている場所だ。その他にも世界バラ祭など色々なイベントが開催され、多くの観光客が訪れる。一方で、観光客は祭り会場だけを見て帰ってしまうため、地域が活性化されないという課題があった。

谷城は古くからソムジン川が都市全体を包み込んで流れており、山の麓に位置した自然豊かな地域で、都心生活から離れた自然の中で静かに暮らしたい人に人気がある場所だった。

また、他の都市部の政策にも田舎暮らしプロジェクトが多く支援されていたため、農業をしたり、ここに定住して、アーティストとして活動をする若い人たちが次々と増え、地域の中でアーティスト同士のコミュニティを形成しながら制作活動をしている人たちもすでに活発に活動していた。

私たちは、事業の方向性を考えるにあたり、すでに周辺に多くの観光資源があり、自然も豊かであることから、文化的なブームを起こし、谷城を訪れる旅行客がさらに訪れ、リピーターとなって何度も訪れるきっかけとなる拠点をつくることを考えた。これが私たちが提案した「堤防マーケット」の始まりだった。

事業の中心になったのは、汽車村の伝統市場の近くにある堤防でたまに開かれていたフリーマーケットだった。着当初、私たちは行政の担当者と、フリーマーケット



100回目開催した記念に堤防マーケットの出品者たちと記念撮影（21.11.20）

の商人たちの意見を聞いてみた。彼らが集まって休んだり、何か打合わせをする場所がなくて困っているとのことだった。

そこで、私たちは彼らが一番必要とする憩いの場を計画するとともに、物を保管する倉庫や販売者たちが一緒に会議などをしたり、観光客が来て工芸体験をしたり展示をしたりするギャラリー空間も併せて提案した。

私たちは、事業を進める中で、役所の担当者とマーケットの販売者たちに常に意識して伝えていたことは、自ら主導して作っていくこと、そしてそれを継続していくことである。

そこで、「マーケットの販売者たちの自立度を上げる」ことを目的として、多くの教育やワークショップを進めてきた。その結果、現在、販売者が、自ら関連の資格を取るため勉強したり、販売方法について悩み、自主的に地方自治体に提案して事業化したりもした。

2週間ごとに開かれる「堤防マーケット」が終われば、販売者と関係者が集まって反省会が行われる。そこでは改善する点などをみんなで話し合っって次のマーケット運営に反映する。

これは持続的で自律的な運営体系を強化させるようになり、消費者と観光客の満足度は毎年上がっていく結果を得た。

これまでに、堤防マーケットは、1,099人の販売者と49,395人の来場者、約3億ウォン以上の売上を達成し、今では、地域特有の手工芸品と新鮮な野菜や多様な文化公演などで、全羅南道全体を代表する現代市場として位置づけられている。

この一連の事業で、谷城は、韓国自治政策大賞で大賞を受賞し、韓国公共デザイン大賞では文化体育観光庁の長官賞を受賞した。受賞することでマスコミを通じて、さらに全国に知られるようになった。

以前は人が少なく閑散としていて、寂しい場所であったが、多くの住民や観光客で賑わい、都市の風景が変わってきた。役所の職員も毎週末、自発的に市場の活動に参加したり、全国から注目されることで、他自治体から視察に来たりもするようになった。

また、地域の他の拠点と連携したり、協力体制も拡大していた。今では、堤防の周辺に多くのカフェやレストランができ、それらのお店の売上も上がる効果もあると言われる。何よりもこの地域に対する関心



事業前の対象地（2015）



事業実施後、堤防マーケットの風景（2016）

も高まり、ソムジン川の周辺環境も以前より快適になったことが一番嬉しいことだ。堤防マーケットが先進事例として知られると、河川に夜間景観照明事業のような景観を整備する多様な連携事業が引き続き行われている。

最後にこの事業を通じて感じたことは、地域文化をもとにした地域再生事業は、地域の精神的・経済的成長と緊密に結びついており、持続的に成長するためには、それらに加えて、将来の社会状況も予測して事業を計画しなければならないということだ。都市再生・景観・建築・デザインなどの分野ごとの境界は無意味であり、観点の変化・真心・感情を通じて、創造性が反映された空間の価値を指向していく計画と実行だけが都市のアイデンティティを蘇らせることができると考えられる。



堤防マーケットの賑わってる姿

【まち歩き感想】

人生のターニングポイントとなった日韓交流会

ソウル市銅雀区庁公共デザインチーム長 ユ・オシク

コロナの感染状況が落ち着き、オンラインで開催されていた日韓交流会がようやく再開され参加できること、そして久しぶりの海外旅行に対する期待感から、数ヶ月も前から気分が浮かっていた。事前にもらった2泊3日の交流会の日程はとてもタイトなスケジュールだったので、あらかじめ視察場所をストリートビューであちこち調べ始めた。

長い間、公共デザインに携わってきた立場から、今回の視察場所は、ストリートビューで見ている限り、適切な空間計画、簡潔なデザイン、優れた素材、完璧な仕上げがとても印象的だった。

現地のことを調べていくと、ますます直接行って確かめたい気持が強くなった。

初日は、空港に到着してすぐバスで下北沢に向かった。世田谷区は、私が勤めているソウル市銅雀区のように、東京の中心部から少し離れた地域であった。

鉄道を地下化した上部利用について配置する施設について、住民から意見を積極的に取り入れる事業のすすめ方は、現在、銅雀区が整備を進めている地下鉄1号線地下化計画と似ていると考え、関心を持って視察していた。注目した点として、ストリートビューでは見ることができない、その場所での人々の行動や活動である。また、現地を案内してくれた担当者の説明を通じて、事業を推進しながら、住民とどのように協議を進め、結果的に住民にどんな影響を与えたのかに対する点についても注目した。

下北沢で素晴らしいと感じた点は、長い時間をかけて住民と十分な議論を行い、公共事業を進めていたことだ。この点が、現在の韓国と明確に異なる。

もちろん、デザインや施工の差はある

が、今の韓国の技術力で似たような空間を作り出すことはできるだろう。しかし、下北沢のような、人々の活動や雰囲気は短時間で作り出すことができない。

それは長い時間をかけ行政と住民、そして事業関係者がお互いの信頼をもとに進めていかなければならない。

私は公共デザイン事業を進めるにあたって、常にそこに住む人のことを考えなければならぬと考えている。

公共デザイン事業は、すべての人のための行為であるため、できる限り、多くの住民の意見を反映し、彼らが自ら主導していかなければならない。だが、韓国の場合、大半の事業が1～2年程度の短期間で事業を終えなければならない。そのため、構造物などの物理的結果を優先してしまい、本来の主役である住民との協議や住民の役割がなくなることが多い。もちろん、形式的には住民の意見をアンケートなどで取りまとめているが、数人の住民代表だけに行われているだけだ。

そのため、住民たちも公共事業に積極的に関わろうとしない。韓国行政や韓国人の意識の中で早い結果を導き出そうとする考え方は、今後時間をかけて改善していかなければならない問題点だ。

2日目は川越市を見学した。韓国も伝統的な建築物が密集している地域は多く、景観をどのように形成しているのかを注目で見学した。

川越市も、景観ガイドラインや行政がトップダウンで主導して景観を形成するよりは、住民の自発的な努力で美しい景観が形成されたという説明を聞いた。

景観の保存や改善は予算の程度によって異なるが、地域性と魅力あふれる場所を作るためには住民の努力が欠かせない。それを日本では多くの専門家たちがサポートしていると感じた。

すべての見学を終えて、ホテルに戻るバスの中で、退職後の自分の未来について考えていた。韓国では公務員として定年退職

すると、趣味生活以外には何もしない。その理由は、これまでの業務に関連した金銭的な不正防止のため、関連機関に再就職を禁止するよう法制化されている。

そのため、多くの行政専門家の経歴が断絶する問題点も持っている。

そんな悩みを普段から持っていたので帰りのバスの中で、そのことについて、日本の国吉さんに話をしてみた。

同じ公務員で退職後、今も活発に活動している国吉さんにアドバイスをもらいたかった。彼はただ今やっていることが楽しく、それが自分の日常であり、今後も続けていくことが自分の役割だと話していた。この話には私は勇気をもらった。

実は、公共機関公共デザイン協議会という団体を数年前から作ることを考えていた。

韓国が公共デザイン事業を本格的に推進してから10年程度が過ぎ、これまで、各機関が個別に事業を進めたが、多くの問題点と限界が明らかになり始めた。

例えば、事業で発生した問題や課題を、自治体間で共有することがなく、同じ事業を進めてしまうことがよく見られる。

私はその解決策として、各自治体の公共デザイン担当者同士で情報交流や意見交換の場を設けてネットワークを構築すればいいとずっと考えていた。これまで、それぞれで進めてきた事業について、皆が問題や課題を共有し、一緒に議論すれば、同じ失敗を繰り返さずにお互いに役に立つだろう。

韓国に帰国して、すぐにその団体を作るため全国にいる公共デザイン部署の担当者に連絡し、2022年12月に「公共機関公共デザイン協議会」を創立することができた。

今後、協議会が日本でも公共機関の担当者とネットワークを構築し、日韓の公務員同士での交流も進んでほしいという願いを込めて、今回の日韓交流会の感想を終わりにしたい。



ストリートビューでは見られない下北沢の夜の風景



平日昼にも関わらず下北沢の賑わっている風景



みんなで夕日を見ながら富士356公園で記念撮影

「生物多様性」を通して都市と生活が見えてくる その5

登録ランドスケープアーキテクト(JLAU,AILA)/TDA正会員 並河 みき

明けましておめでとうございます。今年も生物多様性について一緒に考えましょう。

今回のトピックは前回に続き、都市における生物多様性の模索や取り組みについて。関連する翻訳パネルはWeek19「環境にやさしい植栽管理を市町村にしよう」と、Week29「住んでいる街区に動物の抜け道をつくろう」。Week19では、生物多様性の保全に役立つ植栽管理がテーマだ。ところで、日本ではどのような植栽管理がされているか。私が2017年から3年ほど滞在した文京区の集合住宅では、管理組合が提携した植木屋さんが定期的に敷地内の植栽管理をされていた。具体的には、はしごを使った樹木の剪定と、サツキなど灌木の刈込など。個人的な印象では、生物多様性のことを考えて植栽管理がされていたというよりも、住民のための美観がより重視されていた。一方、市町村による街路樹の植栽管理では、枝葉が道路上に伸びないように、とてもコンパクトに刈り込んでいた。

さて、こちらメルボルンでも道路沿いの街路樹は自治体により管理されるが、その下のネイチャーストリップ（自然帯）と呼ばれる芝生は、その前に住む住民が刈ることになっている。日本でも昔は家の前の道を掃いて水まきをしていたと思うが、おそらくそんな感じで個人個人の管理が期待されている。この「ネイチャーストリップ」

とは名ばかりの、まったく「自然」でないその芝生帯は、ときに住民によってワイルドな野草や、カラフルな花壇に植え変えられる。これは住民たちが行政の許可を受けずゲリラ活動のように実施するので、ゲリラガーデニングと呼ばれる。ゲリラではあるけれど、花の咲く在来種を植えたなら、芝生よりよほど生物多様性に貢献できる。こんな風に行政まかせにせず、自分で興味を持ったら率先して行動に移してしまうのが、この国の人たちのステキなところだ。

このように生物多様性への取り組みは、その自治体の先進性のみでなく、住民の性格や民度によって対応策や普及具合が異なる。そして、こうした人々の行動が長い時間をかけ、やがては生活文化として定着していくのかもしれないと、最近考えるようになった（日本は民度がとても高いので、色々な取り組みができるはず）。

さて、Week29のパネルでは、街区で協力して動物の抜け道をつくる試みが取り上げられ、「レンガを一つ、二つ抜いて抜け道をつなげましょう」と提案されている。そこからは、レンガの多く使われたヨーロッパの街並みが彷彿とする。これを日本風に置き換えればブロック塀を一つ二つ抜いてということになるかもしれないが、昨今、地震でブロック塀が倒れたりしている

本のまちで、できそうなことは何だろう。

以前、東京のまちを歩きながら、このまちのみどりは植木鉢や花壇で成り立っていると感じたことを思い出す。マンションの壁沿いの細長い植栽帯や、個人宅の植木鉢など、様々なスケールや色彩のみどりがつながら、重なり合ってまちができています。その中には放置されているみどりもあれば、きれいに手入れされているものもある。年間降雨量が1500mm（東京）という恵まれた環境の中では、どんなみどりも豊かに育つ条件がそろっている。それなら生物多様性のことを考えて、できるだけ在来種を植えるようにしたり、従来の花壇のように花だけを基盤目状に植えるのではなく、グランドカバー、草花、灌木といった高さや種類の異なる植物を混ぜて、小さな野原をつくる感覚で植えたりするといい。植木鉢や花壇というスケールでの取り組みは、個人でも気軽にはじめられるし、日本のまちのスケールに合っていると思う。そして、その取り組みによってまちのみどりがつながり、昆虫や動物の抜け道ができていくことを想像すると、いつも同じに見えていた風景が少し特別に見えてこないだろうか。



※TDAホームページで当ブックレット翻訳パネルを公開中ですので、合わせてご覧ください。
https://note.com/tda_spinoff
QRコードからアクセスできます。



□色彩空間の可能性を拡大したスーパーグラフィック

僕が大学を卒業した1972年頃、建築物を鮮やかに彩色するスーパーグラフィック運動が活発だった。白く無機的な近代建築に反抗するように、彩色された実験的な色彩空間が沢山生まれた。短期間に多くの実験的な色彩空間を提示したスーパーグラフィックだが、その後、このような表現は商業建築が屋外広告として利用され、一部では景観論争を巻き起こして、やがて衰退していった。スーパーグラフィック運動と入れ替わるようにマンション等の外壁材としてレンガタイルが流行したが、建築外装の流行的な色使いはその後もしばしば、今は黒い外装の建物が多く見られる。



写真① 聖マリア学園

□フランスで出会った色彩

大学を卒業して3年目に、フランスで色彩計画を学ぶ機会を得た。パリにあるカラーリスト、ジャンフィリップ・ランクロのアトリエ“3Dカラー”で環境色彩計画の実践方法を教わった。僕はランクロのアトリエに通いながら、休暇が取れた時は色彩計画事例を見て回った。興味深いスーパーグラフィック作品にも多く出会ったが、同時にヨーロッパの伝統的なまち並みの美しさに惹かれた。石材等を活かした伝統的な建築物が連なるままと共に、それぞれの家の窓枠や扉の個性的な色使いは、統一感と



写真② クレティーユ

適度な変化を併せ持っていた。現代的な建築物を着彩した、新しいスーパーグラフィックの展開は模倣出来そうだったが、この一見何の変哲もないような日常的なまちの景色により強く触発され、色彩計画の大きな課題を感じた。当時の日本の都市の色彩はそれぞれの建築や広告物が勝手に主張していて、脈絡がなく混沌としていた。ヨーロッパの伝統的なまちで見た個性的な地域景観の豊かさは、日本の都市では感じることがないものだった。



写真③ パリのまち並み

□環境色彩学の確立に向けて

当時、ランクロはフランスの地域色の調査を続けていて、アトリエでは採集した色彩をカラーパレットとしてまとめていた。地域の色彩を把握するこの手法を日本の色彩計画に取り入れたいと考え、日本でもすぐに建築物の色彩調査を始め、地域で採集した色彩をカラーパレット化し、さらにその色彩を日本の標準色票として採用されていたマンセル表色系を使って数値化していった。その色彩分布を見ると、一見バラバラだと思われていた日本の建築物の外装にも、慣用色とも呼べる使用頻度が高い色彩があることが分かった。現在多くの自治体が採用している景観の色彩基準は、この頃から調査し蓄積した資料をもとに導き出した。慣用色を把握し、そこからあまり離れないように誘導する色彩基準は、よく言われるようにネガティブチェックであって、個性的なまちの景観がすぐに実現するわけではない。ヨーロッパで見たような個性的なまちの美しさを実現するためには、地域のより狭い範囲にある色彩を定め、建築の色彩をデザインしなければならない。ヨーロッパの伝統的なまちでは、日本で考えた色彩のネガティブチェックはわざわざ基準化する必要がなく、地域の色彩は一般

の人達の意識の中で当たり前に選別されている。そのこともあって、日本で最初に数値による色彩基準を大規模建築物に適用した兵庫県では、ネガティブチェック型の色彩基準と、地域の色彩や素材を重視する景観形成地区の指定を並行して同時に策定している。ネガティブチェックとしての色彩誘導は、景観の教育的な意味合いが大きく、最終的には地域の人達が、それぞれの地域の色彩を意識して育てて行くものだと思う。

□日本の日常の色を取り戻す

1980年代に継続して行った兵庫県の景観形成地区指定のための調査では、日本の伝統的なまち並みの美しさに沢山出会った。赤土壁のまち並みが続く出石、木造三階建の旅館が並ぶ城崎、白壁のまち丹波篠山等、フランスで見た伝統的なまち並みの美しさは、日本でも戦前には何処にでもあったのだろう。日本固有の多くの美しい景色は、経済的で効率的な様々な形の建物で変わって行ったが、人の一生分くらいの時間ではあまり変わらないまち並みがあることが必要であろう。まち並みの変化はもっとゆっくりでよいし、大きな変化は歴史が蓄積された地区とは分けて、新しく開発する地区で試していくものだろう。兵庫県で指定した歴史的景観を大切にしたい景観形成地区は、今では多くの観光客を集めるようになった。全国でも伝統的建造物群保存地区も人気があることを見ると、新しさや大きな変化ばかりがもてはやされる時代ではなくなったことを実感する。変わらない地域固有の景色を育てていくことも環境色彩計画の大きな目標となった。

数年前、以前住んでいた集合住宅の色彩の選定を頼まれた。この住宅の最初の大規



写真④ 出石

模修繕の際に、修繕委員会に参加して改修を手伝ったが、この時少しばらついていた外装色の色相を揃え、予算に余裕があったので、道路に面したゴミ置き場をブロック塀で覆ってタイルを貼った。さらにエントランス前の広場と駐車場の舗装はアスファルトだったが、ベージュ系のインターロッキングブロックに替えた。この改修で替わった外観が住民に気に入られて、引越しをした後も修繕委員として名前が残っており、改修の時には声を掛けてくれる。今回は外壁色の明度を下げてベージュ系のより落ち着いた色とし、マンションの前にあるガードレールを国交省が「景観に配慮した道路施設の色彩」として推薦するグレイ

ベージュで塗装した。定期的な大規模修繕の際に色彩をうまく使えば、建物の資産価値は大きくは落ちないし、周辺の景観は向上する。この集合住宅がある川崎市でも景観計画を策定し、色彩基準も持っている。この色彩基準の運用によって、これまでの建築物の慣用色から大きく外れる色彩は使われなくなったが、地域の個性的な景色をつくるためには、自治体の規制だけでは限界がある。地域の個性ある景色をつくるためには、地域住民のまちに対する愛着や誇りが必要である。これから、日本でも美しい地域の景観を楽しみながら育てていく時代になるのだろう。今、そんな時代の環境色彩計画の在り方を模索している。



写真⑤ ガードレール

身近な景観をつくる

照明デザイナー／TDA副代表理事 近田 玲子

第6回：ワイヤレス照明器具

スタンド使っていますか？

読み書きのためのデスク・スタンドを使う方は多いと思うが、インテリアの一部として使いこなしている人は少ないのではないだろうか。海外のホテルでは、スタンドのあかりなしには部屋で読み書きができないが、私は家でも職場でもスタンドを使っていない。コンセントから必要な場所までコードを這わせなければならない、コードに足を引っかけて転んだり、スタンドを倒すことがありそうだったからである。床コンセントにする手もあるが、テーブルの下にうまく隠さないと、金属のコンセントカバーが飛び出た状態でもっと危ない。

ワイヤレス・テーブルランプ

ところが最近、消費電力の少ないLEDのおかげで、ワイヤレスのかっこいいテーブルスタンドが手に入るようになってきた。2011年の東日本大震災を境に急速に発展してきたLEDは、コンセントからコードが繋がっていることが当たり前だった照明器具を、コードを必要としない照明器具作りへと導いた。

写真上は、防水型ワイヤレス・テーブルランプである。普段は専用充電台に乗せて使い、屋外のテラスで寛ぐ時にはトックリの形をしたランプだけを持ってテーブルに置いて使う。電源は充電式リチウムイオンバッテリー3.6V。USB充電・6時間で、最高に明るくした状態でも8時間点灯する。カメラ業界でダイバーや水中写真家が使用する水中撮影機材を開発・製造してきた会社が製造している。

太陽電池

2016年に岡山後楽園の「春の幻想庭園、夏の幻想庭園」を手がけた時、岡山城の前に広がる4750㎡の広大な芝生地をどう照明するかがキーポイントになると考えた。これまでは光るオブジェを点在させていたそうだが、電気配線を引き回す経費だけでもバカにならない。そこで、RGBに色変化するLEDのソーラーランプ、電球色ソーラーランプの光を、13㎡当たり1台の割合でランダムに散りばめて蛍の海を作ることにした（写真下）。価格は全部で約55万円。広い芝生の太陽光を蓄電して暗くなると点灯することを繰り返す。最初は毎朝回収して、夕方設置することにしてい

たが、実際は昼間も存在が全く気にならず、持っていられることもなかった。エコを取り入れた照明方法は入館者からも多くの賛同を得た。バッテリーには寿命があり電池の交換も必要であるが、仕事場の窓辺に置きっぱなしにしている同じソーラーランプは、2022年の現在も暗くなると点灯している。



ホワイトボード

今回は、恒例の日韓都市デザイン交流会の特集。日本側がホストとなって受け入れを実施。まちづくりにおける「QOL」や「持続可能性」といった世界的にも今日的な課題に取り組む事例として、下北沢の景観先進事例や川越の継続的なまちづくりの事例を紹介

することとなった。韓国側にはどう映ったのか？ 感想を読んでハッとさせられたのは、住民参加の仕組みづくりに興味を持っていたことだ。まちづくりにおいて、「美しい」という表面的な問題よりもなお重要なことがあることを再認識する会となった。